

『大遷移——後期中世世界における気候・ 疫病・社会』より第1章

ブルース・M・S・キャンベル
東京都立大学西洋中近世史ゼミ 訳

第1章 後期中世世界における自然と社会の相互作用

「大遷移 The Great Transition」は、13世紀後半から15世紀後半までおよんだ。それはヨーロッパの拡大や文化面での繁栄、ユーラシア大陸を横断する商業の一体化が生じた一つの長い時代に終止符を打ち、ゆくゆく始まる次なる時代の基調となった。「大遷移」が生じ、やがてその進路が方向づけられ、そして決定づけられたのは、環境的要因と人的要因が独特な形で組み合わさることによってである。環境的要因とは、世界規模の気候変動、家畜や人の命にかかわる疫病の再発などのことであり、人的要因とは、戦争の増加や商業・経済の衰退、銀の不足、そして旧世界における大規模な人口蒸発などのことである。こうした展開の生態・地理的な諸側面が今日ようやく目の見たのは、古気候に関する詳細な科学的調査、ペスト菌ゲノム (*Yersinia pestis*) の生物学的解析、黒死病犠牲者の埋葬地へのDNA分析の活用、学術研究におけるグローバル・ヒストリーの重要性の増大、そして国民所得の歴史を14世紀ないし15世紀まで遡る分析のおかげである。1270年代から1470年代にかけて歴史的発展にどのような変化があったかを描写し、説明しようという試みはこれまで数多く行われてきたが、こうした新しい見識を用いて、身体的・生物学的な過程と展開が果たした役割を十分に叙述に盛り込んだのは本書がはじめてだ¹。そのためには、研究

* 本翻訳は第1章のみを訳出しているため、本文および注で参照を指示している第2章以降のSectionおよび図表は掲載していない。注の参考文献は末尾にリストとして掲載した／訳者。

¹ 主要な研究史のレビューはHybel (1989) と Hatcher and Bailey (2001) を参照。遷移に関する主に人類学的な解釈についてはAston and Philpin (1985)、環境に基づく見方についてはHoffmann (2014), 342-51を見よ。

の視野を拡大する必要がある。状況に応じて、ラテン・キリスト教世界とユーラシア大陸全体、また気候について言えば北半球、ときには世界全体にまで拡大する必要がある。

「大遷移」以前は、西ヨーロッパと東アジアの双方で気候に恵まれ、主たる伝染病が相対的に収束しており、技術が進歩し、数多くの制度革新の基礎が敷かれたことによって、人口と経済生産高が安定成長する時期が長く続いていた。西洋におけるラテン・キリスト教世界の再生は、東洋における中国の宋朝、東南アジアのチャンパー、大越国、アンコール朝、パガン朝および南インドのチョーラ朝の台頭と並行していた²。これらの国々はすべて国内外で交易の最盛期を経験し、多くの機会をとらえて市場の棲み分けを進めた。この時代における最大の成果の一つは、独立した交易圏がますます成長・拡大し、ジャンネット・アブー＝ルゴドが立証したように、東洋の商業と西洋の商業をつなぐ、統合された交易世界システムが生まれたことである³。そのとき、ヨーロッパのエリート達は東洋の香辛料、絹、陶磁器を強く求めていた。その支払いには、主としてヨーロッパで急増していた銀鉱山の銀があてられた。こうした発展は、本書第2章（「開花期：実現できる環境とラテン・キリスト教世界の台頭」）の主題である。この発展がなぜ根本的に重要かといえ、この時代の繁栄が扱っていた環境的・社会的基盤が転換し、崩壊してゆくなかで生じた変化を理解するためである。この開花期の拡大と繁栄が長期にわたり持続可能だったかについては議論の余地があるが、開花期がその後の衰退をもたらし、それに強い影響を与えたことは明白である⁴。

変化の最初の兆候は、1260年代と1270年代にあらわとなる。そこから1340年代までが「大遷移」の第一段階である（第3章「危ういバランス：気候の不安定化と病原菌の再流行期における経済の脆弱化」）。このとき、気候、生物、軍事、商業の各領域で変化が始まり、そこからやがて主たる社会生態系がしかるべく転換することになる。決定的な変遷は、「大遷移」の第二の、そしてもっとも劇的な段階である1340年代から1370年代までに起こった（第4章「転換点：

² Lieberman (2009), 687-9; Lieberman and Buckley (2012), 1053-68; Tana (2014), 324-32; Abu-Lughod (1989), 263.

³ Abu-Lughod (1989); 図2.1参照。

⁴ 危機がいくつかの形態をとって現れる必然性の論拠は Aston and Philpin (1985) を見よ。

戦争、気候変動、疫病によるバランスの変化)。大きな転機を迎えるこの短い時期に、深刻で不可逆的な変化が自然と人間の環境双方で生じた。続く100年が「大遷移」の第3の、そして最後の段階である(第5章「不況：抑制する環境と後期中世におけるラテン・キリスト教世界の人口と景気の後退」)。社会生態のプロセスが好転し始め、15世紀の最後の四半期になると、環境および商業の状況が著しく変化し、世界が拡大し再構築されるなかで経済と人口の新たな成長が始まった。第1章第2節で述べるように、最終的にこの状況が、復興を遂げ競争心に燃えた海上経済に従事する西洋と、より古くから商業化し技術も発展していたが経済の停滞に苦しむ東洋とのあいだでの「大分岐」をもたらすことになった⁵。

「大遷移」を特徴づける自然と社会の相互作用の特徴(第1章第3節)と、入手可能な証拠の性質を踏まえてそれをどのようにうまく分析・叙述するか、という現実的な問題(第1章第4節)を考察する前に、「大遷移」の三段階についてそれぞれ根本的な特徴の要点を整理することは下準備として有用である。ここで様々な出来事が明るみになるにつれ、起こったことのうち既定路線など何もなかったことが判明するだろう。どの時期であれ、人間と環境の力の細かな組み合わせ次第で、いくつもの違った結果になりえたのだ。それゆえ、偶然性が重要である一方、人間と環境のプロセスの予期せぬ組み合わせも重要だった。「大遷移」特有の問題が数多く見出されることから、終章(理論、偶然性、組み合わせ、そして「大遷移」)では、「大遷移」はおよそあらゆる重要な点において本質的に歴史的な現象だったことを主張することになろう。

1.01 「大遷移」：年代のアウトライン

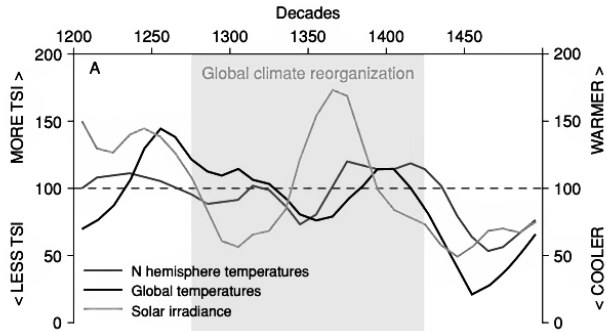
1.01.1 1260/70年代～1330年代：「大遷移」開始

13世紀最後の10年間にウォルフ太陽極小期が始まるまで、太陽光放射度は比較的強く、地球全体および北半球の気温は平均以上に保たれ(図1.1A)、それに応じて両半球の大気循環パターンは安定していた⁶。これは、中世温暖期(中世気候異常 Medieval Climate Anomaly, MCA)最後のまとまった期間である。その

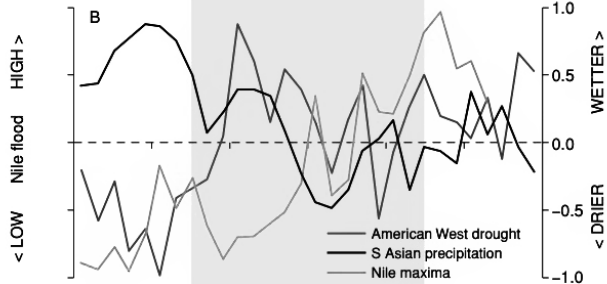
⁵ Pomeranz (2000) は、優位にあったアジア経済がヨーロッパ経済にとってかわられた時点を表すために「大分岐」という用語を作り出した。

⁶ Delaygue and Bard (2010a); Vieira and others (2011); Section 2.02参照。

(A) 1200～1500年の太陽放射照度、地球の気温と北半球の気温を指標化したもの



(B) 1200～1500年の南北アメリカの西部および南アジアの降水量、ナイル川洪水の水面最高値を指標化したもの



(C) 1200～1500年のスコットランドおよびモロッコの降水量と中央アジア乾燥帯の水分レベルを指標化したもの

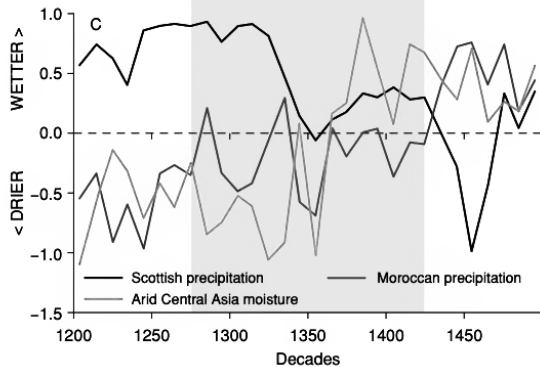


図1.1

典拠：(A) Delaygue and Bard (2010b); Vieira ほか (2011); Loehle and McCulloch (2008); Mann ほか (2008); 100は1250年から1450年の平均値。(B) Cook ほか (2004c); Rein ほか (2004); Rad ほか (1999); Berkelhammer ほか (2010b); Zhang ほか (2008); Wang ほか (2006); Popper (1951), 221-3. (C) Proctor ほか (2002b); Esper ほか (2009); Chen ほか (2012).

顕著な特徴はとくに1250年代に発達した。これを要約すると、図1.1B、1.1Cのようになる。南北アメリカ大陸の西方に見られた大干ばつに近い乾燥状態は、南アジア全域の激しいモンスーン降雨とあいまって、太平洋におけるエルニーニョ南方振動（ENSO）の確かな症状を示している⁷。それに対応するインド洋上のモンスーン循環の配置は東アフリカよりもインドとパキスタンにおいて有利に働き、その結果、モンスーンによるナイル川の洪水量は、カイロで潜在的な最大値をはるかに下回っていた。インド洋、太平洋、北大西洋のあいだの長距離の遠隔相関テレコネクションにより、北大西洋振動（NAO）もまた正の状態で維持されていた⁸。強い西からの気流は、スコットランド東部の定期的な激しい降雨が示すように、北西ヨーロッパの冬を温暖で湿潤なものにし、その分、地中海ヨーロッパや北アフリカの大半で降水量が減少した（図1.1C）⁹。これら南部諸地域での冬の低降雨量が意味するのは、中央アジア乾燥帯に吹く西からの気流もまた湿気が少なかったということだ。その結果、ユーラシア大陸の内陸部は絶え間ない干ばつ状態に陥ったままであったが、とくに1190年代から1200年代初頭にかけてがもっとも厳しかった¹⁰。降水量のわずかな変動は、この広大な乾燥地域に広範な生態上の結果をもたらしたかもしれず、人間、そして生物に与えた影響は、「大遷移」に大きな役割を果たすことになるかもしれない¹¹。

長期にわたり安定していた大気循環パターンが変化し始めたのは、太陽の放射照度が弱まり、地球全体および北半球の気温が下がった1270年代からだった（図1.1A）。東太平洋で海水と空気が温まると、とたんにエルニーニョ現象が頻発するようになった。それに応じて、降水量のレベルは南北アメリカの西部で上昇し、1300年頃の大雨で最高潮に達した¹²。その後、干ばつは定期的に繰り返し起こったものの、決してふたたび1250年代のようにひどくなることはなかつ

⁷ Cook and others (2004c); Rein and others (2004); Section 2.02.1 参照。

⁸ 遠隔相関のパターンとは「地理的に広域におよぶ、気圧と循環の異常事象の頻発する、持続する、大規模なパターン」のことである。United States National Weather Service, Climate Prediction Center, <http://www.cpc.ncep.noaa.gov/data/teleodoc/teleintro.shtml>. Section 2.02.2 参照。

⁹ Proctor ほか (2002a).

¹⁰ Chen ほか (2010); Section 2.02.3 参照。

¹¹ Sections 3.03.1b と4.02.2 参照。

¹² Section 3.02; Magilligan and Goldstein (2001); Mohtadi ほか (2007), 1062–3 参照。

た¹³。同時に南アジアのモンスーンが弱まり始め（図1.1B）、続く1280年代にははじめてインド全体で衰えた¹⁴。すると、今度は遅れてNAOが弱まってきた。1320年代以降、極域の高気圧が南にせり出し大西洋のサイクロンがより南寄りの軌道をとると、スコットランド全体で降水量が減り、北ヨーロッパは何度か著しく「極寒の」冬を経験した¹⁵。南寄りのサイクロンは南ヨーロッパと北アフリカにひとしきり雨をもたらし、湿った西からの気流が中央アジア乾燥帯を通過するようになったことで、ここでも湿度レベルが断続的に上昇し始めた（図1.1C）¹⁶。確立していた循環パターンはほぼすべての地域で不安定になり、それが進行するにつれて、異常気象と連続的な大凶作がユーラシア大陸全体に経済的混乱をもたらした¹⁷。

異常気象が農業を基盤とする経済にもたらした危機は絶大だったが、疾病もより大きな被害をもたらす潜在力を持っていた。たとえば1279年には、イングランドで羊を衰弱させる羊疥癬^{かいせん}の発生で羊の群れが被害を受け、当時ヨーロッパでもっとも上質な羊毛を生産していた当地の羊毛生産量が半減した¹⁸。疥癬の原因となる媒介生物は *Psoroptes ovis* というダニで、羊の皮膚に生息し、その排泄物で動物は急性・慢性のアレルギー性皮膚炎を起こす。1279年の発生によって多くの羊が罹病して死に、あるいは殺処分され、刈り取れる羊毛の重量は急激に落ち込み、さらには羊毛の質が劣化したことで単価が下落した¹⁹。経済面では、国産の羊毛生産量の著しい不足は多方面に大きな影響をもたらし、農業収入がかなり圧縮され、原毛不足によりイングランドの繊維生産量が減少し、輸出による収入が減少し、1人あたりのGDPが直接影響を受けた。さらに、上質なイングランド羊毛に依存する国外の織物業者たちが深刻な原料不足に苦しみ、フランドル地方では産業労働者が暴動を起こしている²⁰。

¹³ Rein ほか (2004); Cook ほか (2004c).

¹⁴ Cook ほか (2004b).

¹⁵ Proctor ほか (2002a); Trouet ほか (2009a); Section 3.02 参照。

¹⁶ Section 2.02.3 参照。

¹⁷ Section 3.02; 図3.3と3.8B 参照。

¹⁸ 羊の数が約30パーセント減少し、羊毛の重さは20～25パーセント減少した。図3.4 参照。Lloyd (1977), 63; Stephenson (1988), 372–3, 381, 385.

¹⁹ 図3.4 参照。

²⁰ Broadberry ほか (2015), 206–7, 227; Section 3.01.2 参照。

イングランドの羊毛生産における商業的専門化、国内の牧羊規模、そして関連する国内在庫、羊毛と毛糸が輸送され地理的に広がったこと。これらが要因となり国内の1500万頭の羊が感染にさらされ、初期の段階では、その感染拡大に対し把握が追いつかないほどだった。実際、商業取引は、媒介生物によって蔓延してゆく家畜伝染病を増幅させ、国家規模の農業災害をもたらした。また、続く数十年間、牛と人間が高密度な環境に置かれていたこととあいまって、商業取引により牛ペストと人間ペストの両方が普及し、後者は何世紀にもわたってヨーロッパに影響をおよぼした。

牛ペスト（別名牛疫）は、10世紀半ばにヨーロッパ家畜生産者にとって大きな脅威となった²¹。300年以上ものあいだ、農民はウイルス感染症のなかでもっとも毒性が強く、拡大しやすいこの病気をどうやらほとんど恐れていないようだった。しかし、1290年代から1300年代初頭にかけて、モンゴル軍のユーラシア大陸支配により同緯度帯での移動が増加すると、東ヨーロッパと中央ヨーロッパの年代記作家たちがふたたび原因不明の牛の大量死を報告するようになった²²。その後1316年から1321年のあいだに、異常気象とひどい生態上のストレスによって牛疫はボヘミアで爆発的に拡大した。またそこから西に急速に広がり、牧畜の群れを駆逐し、牧畜経営が盛んなアイルランドの大西洋岸に至るまで、北ヨーロッパで重要な荷引き牛の命を奪った²³。ユーラシア大陸内部、土着の家畜にだけ広まっていた風土性伝染病として長いあいだ事実上休眠状態だったこの病気は、生態上のストレスと商業取引が組み合わさることで増幅したのである。その結果、急速な拡大から致命的なパンデミックとなり、西洋の生物学的にナイーブな家畜はこれに対してほとんど抵抗できなかった²⁴。

一方細菌学者と遺伝学者は、1268年頃以降のある時点で、腺ペストの病原体であるペスト菌（*Yersinia pestis*）が中央アジア乾燥帯の保菌地域内でより活性化したと推測した²⁵。ペストが動物性風土病から動物性流行病に急速に発達す

²¹ 809～810年に牛の伝染病（おらく牛疫）が発生し、オーストリアからイングランド、アイルランドにかけて多くの年代記に詳細が記録されている。Newfield (2012), 939～42年の牛疫についてはNewfield (2012) を見よ。

²² 図3.25, 3.29, 3.30 と Section 3.03.1b を参照。McNeill (1977), 134; Abu-Lughod (1989), 154-84.

²³ Newfield (2009); 図3.25を参照。

²⁴ Spinage (2003), 51; Section 3.03.1b 参照。

るとき、新たな系統の増殖、あるいは多分岐が起こるという特徴がある。これは、生物学上「ビッグバン」と呼ばれる²⁶。生物学者はこうした発達が、亜乾燥地域である中国西部のチベット高原青海地方で発生したと考えている。ペストはそこで、地中に穴を掘る在来のスナネズミやマーモットの動物性風土病として長らく存続していた²⁷。植生の成長、野生のげっ歯類の数、そしてそれらが運ぶ寄生虫であるノミと病原体全般に対して西からのより湿った気流が作用し、その刺激によって動き始めた栄養カスケードがペスト活性化の原因の一つとして考えられるかもしれない。いったん数が増え、活動が拡大した結果、保菌地域を横切る交易路を往来するキャラバンが病原菌とその保菌者である昆虫を、シルクロードに沿ってさらに西方の森林に生息するげっ歯類の群れまで送り届けたのかもしれない。するとペストは、1338年までに、西側がそのままハンガリー大平原にまで広がるステップ草原の最東端、キルギスのイシク・クルに到達していた²⁸。それ以前だった可能性は残るものの、まさにこの時点でペストは変質し、動物原性感染症として相当数の人間の大量死をもたらしたのだろう。しかし、ペストはその厄介な潜在力ゆえに、カスピ海盆地を横断してキプチャク＝ハン朝領内に到達し、そこからジェノヴァ人が管轄する人の往来の激しい黒海の Caffa、ペラ、トレビゾンド港に到達するまで完全には明るみにならなかった。その後、ジェノヴァ人の広大な海運交通を利用して地中海を渡り、その先に到達したのである²⁹。

ユーラシア横断の隊商ルートに沿って疫病が何らかの要因でじわじわと蔓延するあいだ、東西を結ぶその他のより重要な商業上のつながりが途切れつつあった。そのプロセスの契機となったのが、1258年のバグダードの劫略に始まり1291年のアッコの陥落に終わる、モンゴルとマムルーク朝の中東での征服活動である。これにより、ペルシア湾と東地中海をつなぎ、かつて盛んだったシリアを横切るルート上で人の往来が阻害・抑止された³⁰。十字軍国家の敗北により、イ

²⁵ Bos ほか (2011), 509; Cui ほか (2013), 579–80; Section 4.04 参照。

²⁶ Cui ほか (2013)。

²⁷ Section 3.03.2c 参照。

²⁸ 図4.9 参照。

²⁹ Section 4.03.3 と 図4.9 参照。

³⁰ Abu-Lughod (1989); Section 2.05.1 参照。

タリアの海運共和国ジェノヴァとヴェネツィアは、従来の商業的特権を失ってしまった。報復に燃える教皇がムスリムとの取引を停止したことで、かつてにぎわっていたイタリア商業の交流が、そして珍重された東方との奢侈品取引が抑制されたのだ。同時に、カーリミー商人の連合は紅海経由で地中海に達するインド香辛料貿易を厳しく統制し、商品から最大限の関税を徴収した³¹。そうした状況下で、ヴェネツィア、そしてとくにジェノヴァが代替の商業機会を見出したのが黒海だった、というのはほとんど驚くにはあたらない。モンゴル帝国の創建後、北京に端を発し、青海経由でサライ・バトゥとタナに向けて延びるアジア横断隊商ルートが繁栄していたが、黒海はその終点だった。また、新たなルートとして、ペルシア湾からペルシアのタブリーズを経由してトレビゾンドに至る貿易の終点でもあった³²。しかしこのことは、すでにヨーロッパ・アジア間で生じていた貿易の不均衡のさらなる悪化や、銀や金の相互流出をくい止めることにはならなかった。貿易の不均衡は、ヨーロッパの銀鉱山で採掘量が増加していれば許容できたはずだ。しかし、採掘量は1330年代以降一度も増加せず、減少の一途をたどった³³。

その間、イタリアとアルプス以北地域の交易は、それまで中立的だったシャンパーニュ定期市の運営にフランス王権が政治干渉したことで深刻な停滞を被った。シャンパーニュ定期市はその当時、ヨーロッパ商業の北部におけるハブだった。フィリップ4世（在位1285～1314年）がイタリアとフランドルの商人に対して公然と差別的待遇をとった結果、定期市が扱う交易取引量は減退した³⁴。ジェノヴァ人はその頃、ジブラルタル海峡経由でブルージュと直接海上のつながりを確立していたが、コルセアとバーバリーの海賊による脅威に対抗するため重武装したガレー船を使用し、このつながりを発展させた。しかしこのことは、少なくとも輸送費の5倍増という結果をもたらした³⁵。山賊、野盗、そして強奪も辞さない領主たちもまた、古くからの陸路を往来する商人に脅威を与え、取引により大きな危険と損失をもたらした。取引コストが上昇すると、利

³¹ Munro (1991), 122.

³² Section 3.01と図3.1 参照。

³³ Section 3.01 参照。

³⁴ Edwards and Ogilvie (2012); 図3.1 参照。

³⁵ Munro (1991), 124–30.

益率の低い低価格商品の大量取引の損害がとくに大きいことがわかり、製造業者と商人は、そうしたコストに耐えうる高価格商品への切り替えを強いられた³⁶。このことは、フランドルの毛織物業者が安価で軽いセイ（says）の代わりに上質な羊毛を扱ようになったことを説明してくれる³⁷。こうして北海と地中海双方の交易圏に問題が山積していたことから、ヨーロッパが1290年代から悪化する商業不況に直面し、そこからただちに立ち直る見込みがほとんどなかったことは驚くにはあたらない³⁸。

製造部門とサービス部門の拡張が停滞したことで、さらなる人口増加の影響は農業部門を直撃した。その結果、保有地の極端な細分化、転賃による地代の追求、そして環境上周縁にある土地の漸次的な開拓と植民が進み、農村部の過密が顕在化した³⁹。これが進行すればするほど貧しい農民世帯が増加し、土地を持たない人々の都市への集団移住が増加した。こうして、都市の貧困問題が深刻になった⁴⁰。周期的に起こる収穫不足により、困窮を理由とする土地売却が急増し、保有規模が絶え間なく縮小していったことで、こうした傾向は悪化の一途をたどった⁴¹。14世紀が始まるまでに、イングランドの5世帯に2世帯は最低限の生活水準を維持しているにすぎなかった⁴²。国際的な不況の深刻化、天候不順と家畜伝染病の頻発、これまで以上にリスクを背負って引き起こされる戦争。無惨にもそのあおりを受けたのは、そのようにほとんど収入もなく、経済的に疎外された世帯であった。先の開花期の活況は、不安定なバランスに取って代わられたのである。

1.01.2 1340年代～1370年代：一つの社会生態系からもう一つのそれへ

1340年代になると、一連の自然災害や人災がじわじわと具体化してきた。グローバルな気候再編が加速し、きわめて不安定な段階に入った。戦争は激化し、国際交易や経済活動を低迷させた。ペストは黒海沿岸部まで到達し、7年のう

³⁶ Munro (1991), 111-14, 133-8.

³⁷ Section 3.01.2; Munro (1991).

³⁸ Section 3.01 参照。

³⁹ Section 3.01.3d 参照。

⁴⁰ Section 3.01.3b と3.01.3d 参照。

⁴¹ 図3.16と3.18 参照。

⁴² 表3.2と図3.10 参照。

ちにヨーロッパの取引圏全域に広がった。これら三つの危機は、結びついて一つの完全なる嵐となった。つまり、各構成要素が他の活動を支え、増幅させたのである。ある一つの社会生態系からもう一つのそれへ急激に移行したのは、まさにこの複合現象の巨大さと包括性ゆえであり、またそれがもたらした予期せぬ帰結であった。そうしたことから、1340年代から70年代は「大遷移」の中心的なエピソードを構成している。

ほぼいたるところで、明らかに気候は不安定になった。それまで高レベルの日照量によって維持されてきた大気循環パターンが、日照量の著しい減少が60年間続くことで弱まったためである。地球の寒冷化により、北半球の気温は過去8世紀以上で最低レベルに落ち込んだ(図1.1A 参照)。それとともに、海・大気の相互作用、気圧の勾配、大気循環パターン、風力や風向、生育条件にも重大な帰結をもたらした。温帯の樹木の成長への負の影響は1342年から1354年まで年輪の幅が著しく狭まっていることから明らかで、とくに1348年がもっとも著しい⁴³。樹木年代データ、そして両半球ではっきり観察される年輪パターンは、気候が世界規模で強い影響をもたらしていたことを暗示している。小氷期(Little Ice Age, LIA)に特徴的な気候系が顕在化するにつれ、長いあいだ定着していた大気循環パターンが乱れ、天候は両極端を揺れ動いた(図1.1B, 1.1C 参照)⁴⁴。

アジアは、こうした変化の影響を被った。エルニーニョ現象が弱まり、南アジアのモンスーンの強度と確実性が弱まったためである(図1.1B 参照)⁴⁵。南北アメリカの西部で干ばつは緩和したかもしれないが、それと引き換えに南アジア全体の降水量が減少した。そのため、1342年から1346年まで、中国はMCAのあいだは例のない規模の大干ばつに見舞われた⁴⁶。このことは、アジアの他

⁴³ 図4.2B 参照。

⁴⁴ Grove (2004); Wang ほか (2005); Sinha ほか (2011). 懐疑論者たちは相変わらず小氷期(LIA)の気温がそれまでより目に見えて寒冷だったかどうか疑い続けているが、この見解が見逃している本質的な点がある。それは、この気候期を先行する中世温暖期(MCA)から区別するのは年平均気温ではなく大気循環パターンだった、ということである。Kelly and Ó Gráda (2014); Brooke (2014), 380–4; Mann ほか (2009).

⁴⁵ 図2.4と2.5、Section 4.02 参照。

⁴⁶ Lieberman (2009), 554–9; Brook (2010), 72; Sinha ほか (2011); Lieberman and Buckley (2012), 1073; Tana (2014), 335.

地域と同様、水稲作に重度に依存する社会にとっては災害だった。モンスーンが一度ならず数年続けて吹かなかったことで、その衝撃はより大きいものとなった。天候の遠隔相関の明確な例として、南アジアで弱まったモンスーン循環が東アフリカで強まり、エチオピアにより多くの降水量をもたらし、毎年のナイル川氾濫の原因となるブルーナイル川とアトバラ川の水流を増幅させたことが挙げられる。1341/42年、オールド・カイロのナイロメーターで計測された洪水の水位は、観測史上もっとも高い値になった⁴⁷。1350年代、洪水はさらに高い値を記録し、過去700年のどの10年をとってもこれをしのぐものはなかった（図1.1B）⁴⁸。

1342年、ヨーロッパも異常気象に見舞われた。ジェノヴァの低気圧が珍しく北に進路を変えると、中央ヨーロッパの大半に激しい夏の雨をもたらした。これが前例のない高さにまで川の水位を押し上げ、大規模な土壌侵食を引き起こした⁴⁹。まもなくして、暴風雨がもたらした洪水によって北海沿岸で高潮が発生した⁵⁰。その原因は、北大西洋振動（NAO）が劇的に弱まった結果として生じた北大西洋上の大気循環パターンの再配置だった（表1.1B）。偏西風が北方から南方へと進路を変えその後ふたたび戻ってくると、1346～47年に南ヨーロッパで、ついで1349～51年に北ヨーロッパで過度な降雨により穀物が壊滅した⁵¹。後者は、中世イングランドの記録に残っている限りにおいて唯一の二回連続の凶作をもたらしたものとして際立っている⁵²。同時代人は、自ら経験していた異常気象が季節はずれで不安定なものであることをはっきり認識していた⁵³。彼らが理解する手段を持たなかったのは、このことが気候系の変化の起点を示していたということである。病原体が復活し、戦争や商業不況が経済生産に大き

⁴⁷ 641年から1469年までのあいだ、ナイル川の水面の高さは、オールドカイロのナイル・デルタの先端に位置するローダ島のナイロメーターで毎年測定される値の記録から知ることができる。Popper (1951). そのほか1341/42年の異常気象についてはFraedrich ほか (1997); Hoffmann (2014), 325-6を参照。

⁴⁸ 図5.3 参照。

⁴⁹ Fraedrich ほか (1997); Dotterweich (2008); Hoffmann (2014), 325-6.

⁵⁰ Britton (1937), 139-41; Bailey (1991), 189-94.

⁵¹ 図3.3と3.8B 参照。

⁵² Campbell (2011a), 144-7; Campbell and Ó Gráda (2011), 869.

⁵³ Section 4.02.1 参照。

な負担をかけたとき、生態系は深刻なストレスにさらされ、農業生産高は危険に陥った。

1340年代までに国際的な政治・軍事情勢はますます深刻になり、とくにヨーロッパの対アジア交易に厳しい打撃を与えた⁵⁴。イタリアは、今やイスラーム化していたイル＝ハン朝やキプチャク＝ハン朝との関係は急速に悪化し、ペルシアのタブリーズとドン川河口のターナにあった拠点の放棄を余儀なくされ、1343年にはモンゴル軍がカフファにあるジェノヴァの重要な港を包囲した⁵⁵。また敵対するモンゴルのキプチャク＝ハン朝とイル＝ハン朝の抗争は、それまで問題のなかった中国・黒海間の隊商ルートに危険をもたらしした。そのうえ、1347年にエジプトのマムルーク朝がキリキアの小アルメニア王国を征服し、ペルシア湾と地中海のあいだに唯一残されていた積み替え経路を遮断した。黒海のトレビゾンドに向けて細々と続いていた交易を除き、このことはエジプトのスルタンにインド香辛料貿易の統制を事実上委ねたことを意味する。これにより、ヨーロッパ人は著しくつり上がった価格での支払いを余儀なくされたが、おりまさにヨーロッパの銀鉱山で産出量が低下したときで、そのための余力は次第に失われていった⁵⁶。くわえて、ローマ教皇が難色を示し、財産没収と罰金のリスクがあるなかで、キリスト教徒は対イスラーム・エジプト貿易を行っていた。その結果、アジア・ヨーロッパ間交易は以前の水準のほんの一部にまで縮小した。イタリア人がその交易の中心であった以上、もっとも苛烈に締め付けられたのはまさにそのイタリア経済だった⁵⁷。

戦争の激化は、ラテン・キリスト教世界内部の問題も助長した。イタリアの対立する都市国家間で戦争が頻発し、国家財政を消耗させていた。イングランド・フランス間の戦争の勃発は、フランドルやスコットランドをも巻き込み、経済への悪影響に拍車をかけた⁵⁸。軍事行動それ自体もそうだが、そこから必然的に生じる報復、そして略奪と海賊行為によって、資本蓄積が、そしてより

⁵⁴ Section 4.01 参照。

⁵⁵ Lopez (1987), 387; Phillips (1988), 119; Wheelis (2002); Di Cosmo (2005), 403, 413–14, 418.

⁵⁶ Spufford (1988), 419; Allen (2012), 344; 図5.11 参照。

⁵⁷ Section 3.01.1と図3.2 参照。

⁵⁸ Section 4.01 参照。

重要なことだが、商業が依存する平和と秩序が大いに阻害された⁵⁹。課税はすべての兵士に重くのしかかった。食糧は供出され、商船は海軍用に徴発された⁶⁰。交易にはより重い関税が課され、政治目的から操作された⁶¹。国際的な羊毛交易は大混乱に陥った⁶²。イングランドはデフレによって、フランスは悪鑄によって為替が不安定になった。交戦中のあらゆる国で生じた例外的な資金需要は国際的な金融恐慌の一因となり、フィレンツェでは最後の大銀行家が倒産した⁶³。兵糧供給業者の業績は順調で、賠償金や略奪品、戦利品で潤った人はわずかにいたが、非戦闘員の多くは生活が厳しくなった。気候がますます不安定になるなかで、戦争はあらゆる負の副次的影響をもたらし、凶作に対する社会の復元力^{レジリエンス}を蝕んでいった⁶⁴。

ヨーロッパ経済の見通しは良くなかった。銀の生産量は急速に減少し、利益をもたらす海外市場は失われたままで、アジア交易は衰退して一本のルートに限定され、国際的な信用便益は使い果たされ、軍事的、政治的に望ましくない状況はさらに悪化するよう見えた。ヨーロッパ内部では、租税・関税の引き上げや防衛・保護・保険コストの増大が取引費用を押し上げ、利益率を低下させていた。ごく少数の例外を除いて、ヨーロッパの海外商業は後退し、その地理的範囲は狭まっていた。その結果、国際取引に従事する商人のあいだで、景況感の深刻な喪失が生じ始めていた⁶⁵。農業生産高さえも、戦争による荒廃と悪天候による弊害に見舞われていた。

ペストがいよいよ半乾燥で人口のまばらなユーラシア内陸部を横断してその曲がりくねった旅を終え、1346年に黒海のクリミア沿岸に到達したとき、このように状況は厳しいものになっていた。ステップ草原の生態系に気候変動が影響したことで、野生げっ歯類の地方性感染症として定着していたペストが、最後の段階で加速したのかもしれない。同時代人の報告によると、ペストはすでにジョチ・ウルスの地で死者の痕跡を残し、その後1346年に、人の往来の多い

⁵⁹ Munro (1991), 124-6, 130; Bois (1984), 277-88.

⁶⁰ Maddicott (1987).

⁶¹ Carus-Wilson and Coleman (1963), 194-6; Fryde (1988), 57, 59-60, 66-7.

⁶² Fryde (1988), 53-86; Nicholas (1987), 3, 48-52, 150-1.

⁶³ Hunt and Murray (1999), 116-17.

⁶⁴ Campbell (1995b), 94-6; Sharp (2000).

⁶⁵ Kedar (1976), 118-32.

ジェノヴァのカッファ港でモンゴル包囲軍のあいだで大発生した⁶⁶。この包囲軍から、おそらく昆虫を媒介にして包囲された側にも広がった。市内、そして入港していた船に間違いなくかなりの数生息していた共生げっ歯類へと広がったのだ⁶⁷。ペストのためハーン・ジャーニーベグ（在位1342～57年）は包囲を解いたが、それはペスト菌、その媒介者、その宿主がジェノヴァの船に乗り込み、コンスタンティノーブル、そして黒海沿岸やそれ以外のジェノヴァの小さな植民市に向かったあとのことだった。いったんペスト菌が広大な海上ネットワークに乗ってヨーロッパ商業圏の隅々にまで入り込むと、その拡大は止めようがなかった。続く7年以上にわたり、それは伝染性の高い人間のパンデミックとして顕在化し、小アジア、中東、北アフリカ、そしてヨーロッパ全土、西はアイルランド、北はノルウェーまで広がり、壊滅的な影響を与えた⁶⁸。ヨーロッパの人口の約3分の1はこの最初の発生で死亡した可能性が高く、ある特定の共同体で記録された45パーセント以上の死亡率は珍しいものではなかった⁶⁹。

黒死病の干渉は、これ以上ないほど時宜を得ていた。気候、戦争、商業が連動し、1315～22年のヨーロッパ大飢饉のときさえ生じなかったことが生じたのだ。すなわち、大規模かつ長期にわたる人口抑制である⁷⁰。疫病は続く350年にわたって繰り返し発生したため、この最初の疫病発生は、ラテン・キリスト教世界の疫病的環境にとって決定的なターニングポイントだったということになる⁷¹。黒死病による人口統計への影響は、それゆえ暗く、長期にわたった。その後続いた1360～63年、1369年、1374～75年、そして1382～83年の主たる感染爆発は、黒死病後の出生率上昇による人口回復の見込みを消滅させ、かわりに約5世代続けて人口復原率がマイナスのままという、死亡率優位の状態を確立した⁷²。1380年代までに、ヨーロッパ人口の正味の減少率は約50パーセントだった。

疫病により生産者と消費者の双方が死ぬことで、いっせいに需要と供給が減少し、その結果、生産要素価格、商品価格、人間と自然資源とのあいだの生息

⁶⁶ Section 3.03.2c 参照。

⁶⁷ Wheelis (2002)。

⁶⁸ Section 4.03.3と図4.10 参照。

⁶⁹ Section 4.03.4 参照。

⁷⁰ Section 3.01.3e; Jordan (1996); Campbell (2009b); Campbell (2010a)。

⁷¹ 図 4.9 参照。

⁷² Sections 4.04と5.03.2 参照。

上の関係が変容した⁷³。このことは、歴史記録を参照すると際立っている。あらゆるところで、人口統計、経済、文化、環境に関する明白な断絶が見られるからである。人口の激減によって一人当たりの通貨供給量が増大したわけで、利点がないわけではなかった。疫病による大量死は、農村の人口集中や構造的貧困という手に負えなかった問題に残酷な解決策ももたらしたのだ。生存者は日当たり実質賃金の大幅な上昇、土地への権利の改善、家計収入の拡大の可能性という恩恵を受けた。当初、これらの肯定的な側面は商業不況がもたらす最悪の影響を緩和するのに役立つ、イングランドのように人口が多く商業化された経済においては、一人当たりのGDP上昇に実を結んだ⁷⁴。しかしそのブームは短命で、それをもたらした人口統計上の例外的な状況より長く続くことはなく、また普遍的な現象とも言えなかった。大規模な人口減少は、イベリア半島の多くの地域に見られるように、まばらに定住した地域や国にとって都合が悪かった。人が少なすぎて、専門分化や生産性をそれまでの水準で維持できなくなっていたのだ⁷⁵。生物学上の衝撃はあらゆる国で共通だったかもしれないが、この汎ヨーロッパ規模の破滅に対してそれぞれどう反応したかは、大量死が起こった社会生態系の文脈次第だった。

1.01.3 1370年代～1470年代：長い衰退

1370年代から1470年代にかけて、一方で気候的・疫病的な要因、他方で商業的・経済的な力が結合し、人口統計と経済の本格的な回復を阻害した。一部の国が経験した疫病後の瞬時の経済成長さえ一過性のものと証明され、1420年代まで、半世紀ないしそれ以上にわたり停滞状態が続いた⁷⁶。この100年間は「大遷移」の第3の、最長の段階に相当し、気候が悪化し、しばしば気候と協同して病気が死亡率の水準を高め、人口は減少し、市場は不況のままだった。マムルーク朝とオスマン帝国の権力は拡大し続け、ヨーロッパとアジアの直接貿易を再建しようとする動きに対しておよそ通過不可能な障壁を立て、ヨーロッパの確立していた交易地域をさらに侵犯した。西方の東方に対する恒常的な貿

⁷³ Sections 5.04.1と5.04.2 参照。

⁷⁴ Section 5.05 参照。

⁷⁵ Álvarez-Nogal and Prados de la Escosura (2013); Campbell (2013c).

⁷⁶ 図 5.14B 参照。

易赤字ゆえ、ますます銀不足に陥っていた商業化された地金経済は枯渇の一途をたどった。銀を別にして、当時は一人あたりの資源が比較的潤沢だったが、それをより集中的に利用するための経済的誘因は相変わらず脆弱で、人間と農業の再生産に対する環境上の制約は強いまだだった。

15世紀は小氷期（LIA）のうち最初の長い寒冷期にあたる⁷⁷。14世紀後半に太陽放射照度がわずかに復活し〔チョーサー極大期〕、その後遅れて地球全体および北半球の気温が全体的に回復した（図1.1A）。しかし、これは以前の循環パターンを復活させるほど十分には持続しなかったことがわかる。かわりに、14世紀末に「シュペーラー極小期 Spörer Solar Minimum」が始まり、小氷期という異なる循環パターンへの移行を決定的なものにした。太平洋の状況は影響力を持ち続けた。たとえば、エルニーニョ現象がより一般的になり、アメリカ西部は引き続き激しい干ばつをまぬがれ、南アジアではモンスーンの強度が変動し中世温暖期（MCA）のピーク時まで回復できず、東アフリカのモンスーンが断続的に湿気を増すにつれて、ナイル川で毎年生じる洪水は水位が上昇し、変動しやすくなった（図1.1B）⁷⁸。一方、シベリア高気圧が強まり、北大西洋振動（NAO）は弱まった。北欧はより冷たく、乾燥した気流にさらされる一方、南欧と北アフリカは冬の降水量増加による恩恵を受けた。偏西風がより南方のコースをとることで、より湿った気流が中央アジア乾燥帯に定期的に入り込むことを可能にした。

シュペーラー極小期のもっとも低迷した時期である1450年までに、地球の気候は大幅に再編された。図1.1では、小氷期でもっとも寒いこの期間のあらゆる変数の値が、中世温暖期の大気循環パターンがなおはっきりと優勢だった1250年代の対応する値とどれだけ異なっているかに注意すべきである。中世極大期（Medieval Solar Maximum）とシュペーラー極小期（Spörer Solar Minimum）という二つの太陽活動の基準点が、この長きにわたる期間を縁取っていた⁷⁹。この期間が終わるまでに、北半球と地球全体の気温は0.4～0.8℃低下し、ヨーロッパ北西部では作物を生育できる時期が短くなった。そして、たびたび厳冬となり、南ヨーロッパでは冬はより湿度が高く、夏は涼しくなり、中央アジアでは乾燥

⁷⁷ 図2.2と Section 5.02.1 参照。

⁷⁸ Hassan (2011)。

⁷⁹ 図2.8と2.9 参照。

が和らぎ、南アジア全体でモンスーンはより弱く、より不規則になっていった⁸⁰。

気候の遠隔相関ゆえに、ユーラシアにおいて気温、降水量、循環の変化による影響を受けない地域はなかった。いたるところで気象パターンがより不安定になり、異常気象の発生率が高まることで、生態系へのストレスは強まり、農業生産者はより不確かな状況に置かれることになった。北半球で10箇所、南半球で3箇所における年輪年代データに基づくと、気候の負の影響は1453年から1476年のあいだが非常に強く、そのうち1460年代が総じてもっとも顕著だった。この1460年代には、1458年頃のクワエ山噴火で発生した、火山性エアロゾルという爆発による噴出物が太陽放射照度の低下に影響したのかもしれない⁸¹。このエピソードは、多くの点で「大遷移」における気象上の構成要素の頂点を示すものである。

この長い期間を通じて、ペストは疫学体系の活発な構成要素であり続け、周期的に生じた死亡率の危機により、死亡率は高い水準を維持していた。おそらく、中央アジアの保菌地域からペスト菌は再来していただろう。しかし、より大きな港市や、ことによると森林のアルプス・マーモットの群れのあいだで伝染病の半永久的な保菌が定着していない限り、ペストはほとんどの場合ヨーロッパの村落や都市で広まることで保持された⁸²。感染がどこに残り、どう維持されたかにかかわらず、ペストはいまや生活の確固たる現実であった。その宿主や媒介生物が当時支配的だった天候や生態の状況に敏感に反応したことは、次のことを意味した。すなわち、疫病の流行は一般に、収穫が悪天候により落ち込むといつでも拡大し、貧困をかきたて、同種の感染を広げた、ということである⁸³。それゆえ、この期間の大半で気候と病気は協調して作用し、ヨーロッパ人は数世代にわたり健康状態の悪化、予想外の死、死亡率の上昇、そして人口復原率の不足といった負の人口スパイラルに陥った。そしてそのスパイラルにより、衣食住の向上といったプラスの効果を相殺した。ようやく15世紀の末

⁸⁰ Sections 5.02.1と5.02.2 参照。

⁸¹ 図5.13; Bauch (2016). Frank Ludlow との個人的なやり取りによれば、氷核という証拠に基づくと、1453年頃に熱帯の噴火、1458年頃に南太平洋のクワエの爆発的な噴火、そして1462年頃に北半球高緯度地帯の噴火があったとのことである。

⁸² Section 4.04.2; Carmichael (2014); Schmid ほか (2015)。

⁸³ Section 5.03.1.

になって、生き残った人々はペストと共存する能力をゆっくりと発達させていった。何年もかけて疫病への対処法や封じ込め方を学んできたことが実を結び、数世代にわたる遺伝子選択が累積した効果で、生き残った人々はおそらく有利だったのだろう⁸⁴。ペストはその殺傷性を持ち続けていたものの、人口上の窮地は脱し、もはや死亡数が出生数を超えることはなくなった。こうして、15世紀の最後の四半期から、西ヨーロッパ人口は徐々に増加し始めた⁸⁵。

ヨーロッパの経済活動が最低まで落ち込んだのは15世紀の第3四半期だった。これは人口増加が不十分で内需を低迷させたためで、銀の不足は多国間の交流を抑制し、戦争、海賊行為、奴隷の強奪によって地中海の海上商取引は支障をきたすようになった。そして、オスマン帝国はコンスタンティノープルを奪取し、黒海の支配権を獲得し、またたく間にバルカン半島を侵略した。ヨーロッパは何世紀にもわたって商業的に孤立していたわけではない。国際交易は続いていたが、その規模が縮小していたのである。そのリスクは高く、ニッチ市場をうまく活用しない限り、景気楽観論が盛り上がる余地はほぼなかった。たとえばイギリスでは、15世紀の第3四半期における輸出の国民所得に占める割合は、14世紀の第1四半期の半分ではなかった⁸⁶。その原因の一つは過酷な天候にあった。厳しい雨と冷え込みは人や物資の移動を妨げ、穀物、ワイン、羊毛といった基本商品の生産を定期的に落ち込ませた⁸⁷。

このような不利な状況で、わずかな進取的な沿岸地域を除き、経済成長率は依然として下落傾向にあった⁸⁸。都市は自都市を維持しようと奮闘していた。その結果、経済的な活力、あるいはその不足を示すもっともわかりやすいバロメーターの一つである都市化率は停滞、または低下した⁸⁹。労働力不足は、男性の実質日給率をそれまでにない水準まで高めたかもしれない。しかし、市場の需要が滞り、労働力が乏しいうちは、商品やサービスの消費ではなく、余暇の消

⁸⁴ Sections 4.04と5.03.2; Laayouni ほか (2014)。

⁸⁵ Section 5.03.2と図5.7。

⁸⁶ Leverhulme Trust, Reference Number F/00215AR の助成を受けた「ブリテン島とオランダの国民所得の再構成——1270/1500年から1850年まで」プロジェクトの成果に基づく概算を提供してくれた Bas van Leeuwen に感謝する。

⁸⁷ Sections 5.02.2と5.04.1 参照。

⁸⁸ Sections 5.04.1と5.04.3 参照。

⁸⁹ Section 5.04.3と表5.1 参照。

費を増やすことが多くの人々のデフォルトの選択肢となった⁹⁰。十分な雇用を生み出す原動力に欠けていたのだ。経済界の縮小・再編、そして総じて内向的になるといった移行は完了していた。興味深いことに、これと関連してはいるものの異なる理由から、ユーラシア大陸の反対の端で平行反転が起きていた。東方でも、13世紀の世界経済の好況からの後退は、少なくとも同程度に大きかったのだ⁹¹。

キリスト教世界の収縮は末期的なものではなかったが、回復の種が芽を出すのに時間がかかった。ついに15世紀の最後の10年間で社会が上向いた。12世紀から13世紀にかけての好景気で築かれた法制度、財産権、生産要素市場や商品市場は、この経済成長のために安全なプラットフォームを提供した。これらは、経済が下向いているあいだに試行・再編・改善されてきたものだ⁹²。技術もまた「大遷移」のあいだに進歩し、そのなかでもとくに艦船建設や航海術は重要な分野といえるだろう⁹³。貴金属の不足は相変わらず深刻な制約になったが、信用の拡大や、多くの新しい金融手段によってそれは部分的に和らいだ⁹⁴。また進取の気性に富むヨーロッパ人は、絹、綿、砂糖、香辛料、陶磁器などアジアの高価値商品の代わりに入手先を、より身近なところで開拓していた⁹⁵。

ムスリムの仲介商人は、取引の手数料を求めることでユーラシア全土の古い交易ルートを支配していた。そして、とりわけ1453年にオスマン帝国がボスフォラス＝ダーダネルス海峡の覇権を獲得したことで、ヨーロッパ商業は単価の低い外洋への進出が増えていった。黒海から締め出され、地中海の大半でオスマン帝国やマムルーク朝のもとで活動することを強いられたヨーロッパ人は、バルト海、北海、南北の大西洋で、より身近な商業の機会を最大限活用した。より大きく操作しやすい船、よりよい航海用機器の恩恵を受けて、彼らはさらに大西洋の南や西へ調査に乗り出し、その結果1490年代にアメリカ大陸を発見し、喜望峰に到達した⁹⁶。13世紀の状況と対照的なのは、ヨーロッパ商人が活性化

⁹⁰ Broadberry ほか (2015), 283–5.

⁹¹ Abu-Lughod (1989), 361 [『東方の凋落』は『西方の台頭』に先んじていた]。Lieberman and Buckley (2012), 1068–77; Tana (2014), 332–7.

⁹² Section 2.04 参照。

⁹³ Unger (1980); Hoffmann (2014), 359–64.

⁹⁴ Bolton (2012), 270–95.

⁹⁵ Phillips (1988), 227–53.

したユーラシア交易で目立った役割を果たした、ということだ。このユーラシア交易は大量の新世界の銀によって円滑なものになり、総じてヨーロッパにとってより有利な条件で行われるようになった⁹⁷。さらに、ヨーロッパ内部で重大な運命の逆転が生じた。その道筋を先導したのはもはやイタリア商人ではなく、北部低地地方の商人だった。新しい開花期が始まり、「大遷移」の時代は終わった。

1.02 大遷移と大分岐

11世紀にヨーロッパで商業革命が徐々に始まっていた頃、宋朝の中国はその時代でもっとも経済発展していた。ローマ時代の街道、都市、リテラシーといったインフラを実質的に引き継いだイタリアをもってしても、宋の洗練された技術と経済の発展には敵わなかった⁹⁸。また中国はその広大さと統一性ゆえに、政治的に分断されたヨーロッパと比較してより低い取引コストの恩恵を享受できた。しかしながら、1235年から1279年のあいだで、最初は北宋、ついで南宋に対して行われたモンゴルの征服によって、中国経済の優位は著しく低落した。しかしそのようなことがあっても、経済の立て直しは元の初代皇帝フビライ＝ハンの治世で十分達成された。だからこそ、元と同様に商業的繁栄を享受していたヴェネツィアのマルコ・ニコロ、マッフェオ・ポーロは、フビライ＝ハンの宮廷を訪れたときに元の繁栄ぶりを見て感銘を受けたのである⁹⁹。しかし、中国元朝の繁栄はフビライ＝ハンの治世を最後に長続きはしなかった。14世紀のあいだに不安定な環境と王朝の衰退の二つが合わさり、その打撃によって中国とその東南アジアの隣国は深刻な経済停滞の連鎖に苦しんだ¹⁰⁰。これは、一人当たりのGDPで見ると、ヨーロッパ経済がよりダイナミックに推移し、自力で持ちこたえているか、小幅な利益を上げていた時期だった¹⁰¹。西方で経済情勢が徐々に回復し、中国など東方で衰えていった結果、中世の終わりまでにはヨーロッパの最先進地域がアジアのそれに追いついていた。

⁹⁶ Section 5.06 参照。

⁹⁷ O'Rourke and Williamson (2002), 143–364.

⁹⁸ Broadberry ほか (2015), 375, 384–7; Lo Cascio and Malanima (2009).

⁹⁹ Yule (1875).

¹⁰⁰ Brook (2010), 71–2; Lieberman (2009), 551–9; Lieberman and Buckley (2012).

¹⁰¹ Section 5.05 参照。

ポルトガルがアフリカを回る直接航路を発見したのち、およそ1500年頃から経済的に活発な一握りのヨーロッパ諸国が先行し、世界商業を指導する役割を引き受けることになった。北部低地地方の国々はこうした発展において最初の先導者となり、17世紀までにはおそらく一人当たりのGDPは中国のそれと同じか、それより高い水準に達した¹⁰²。同世紀の後半、イングランドの経済成長が活発になり、東西の経済に溝が広がった。これは「大分岐」として知られるものだ¹⁰³。こうした結果は、東洋が主導し、西洋が立ち遅れ、ヨーロッパではなくむしろアジアの商人と商品がユーラシア横断商業を支配していた2000年紀初頭において予測できることではなかった。また次のことも予測しえなかった。すなわち、14、15世紀のさまざまな逆転現象は、北海南部地域における商業と手工業の比較優位性を強め、その構成経済を上昇軌道に乗せるまでになっていたことを。この中核地帯では、「大分岐」の元となるものは「大遷移」の展開のなかにあった。その後、ブラバント、ホラント、イングランドが次々と成長を遂げ、ながらくヨーロッパのリーダーだったイタリアを追い抜き、ついで当時中国でもっとも先進的で商業的に発展していた地域をも追い抜いたのである。

1.03 自然と社会における決定的な遷移

「大遷移」の時代が循環ではなく遷移だというのは、それが社会生態的な旧態へ回帰しなかったからである。その進展はスムーズでも、ずっと一方向に進んだわけでもなかった。一時的な衰退や後退は、その軌跡に本来備わっていたものである。それは不安定さについても同様で、凶作や飢饉、洪水や氾濫、干ばつ、動物や人間の死亡数の急増と小康状態、反乱や戦争、王朝の崩壊、金融恐慌や銀行破綻、そして商業の混乱を見ても明らかで、とくに14世紀はそうした時代としてよく知られている¹⁰⁴。遷移の各構成要素がそれ自体に備わる強い力によって駆動する一方、環境と人類の発展に際立った共時性が見られることは、それらに重要な相乗効果があることを示唆している。

気候の影響は広範囲におよんだ。というのも、それは生態や生育条件、環境収容力、周縁的な環境における生存能力、航海条件、そして異常気象を経験す

（九）¹⁰² Broadberry ほか（2015）、375–6、386。

（二）¹⁰³ Broadberry ほか（2015）、375–6、384–7；Pomeranz（2000）。

50 ¹⁰⁴ Scheffer（2009）、96–105、282–95；Tuchman（1978）。

るリスクを左右したからである。微生物病原体とその宿主、媒介者は生態学的に影響を受けやすく、それゆえ気候条件の変化にただちに反応する。いったん解き放たれるや、時代状況に応じて動物や人間に大きなパンデミックをもたらし、これが人口の規模・構造・動態に選択的に影響を与え、そして動物と人類の双方の遺伝的遺産をフィルターにかけた。人間は密集して、あるいは広域に分布して生活することで疫病が大陸規模で蔓延する前提条件を作り出し、その感染を無意識のうちに促進した。そして、さまざまなやり方で、結果としてもたらされた健康状態や資源のバランス、相対的な要素価格の変化に対応した。食糧、有機原料、生物由来の運動エネルギー源を再生産するなかで、人間もまた気候によって試され、影響を受けた。そして、成功の程度の差こそあれ、気候がもたらす際限無い不確実性に対して、技術面、あるいは制度面で解決策を前向きに模索した¹⁰⁵。化石燃料への依存は解決策の一つであるが、それにより今度は人間が二酸化炭素を排出することで、気候に逆向きの影響をおよぼすことになった¹⁰⁶。それゆえ、中世後期世界の歴史を理解し、説明するためには、こうした気候・疫病・社会のあいだの相互作用を正しく理解することが求められる。つまり、社会と同様、自然もまた歴史的变化の主役として認識される必要があるのだ¹⁰⁷。

この広大な歴史的シナリオには、自然と社会のプロセスとそれらの複雑な相互関係が含まれ、これらはいわば社会生態系 (socio-ecological regime) とでも呼べそうなものを形作っている。気候と社会、環境と生物、そして微生物と人間が、このような動態システムを構成する6つのコアである (図1.2)。各構成要素はそれ自体として準自律的な下位組織とみなされるべきで、そのなかには直接・間接的フィードバックによって連結した部分要素がある。そのため、それぞれが固有の独立した原動力を持つ。とはいえ、何ものも孤立して存在することはない。したがって、6つのコアとなる構成要素のうちどれか一つが変化することで、他の一つないしそれ以上の要素も変化するだろうし、その際、最初に生じた変化は、続いて変化した他の構成要素の状態が優位になることによって部分的に影響を受ける、という性格を持つ。このようなシステムが均衡を保つ

¹⁰⁵ Mokyr (1992).

¹⁰⁶ Kander ほか (2014).

¹⁰⁷ Campbell (2010a); Hoffmann (2014), 1-20.

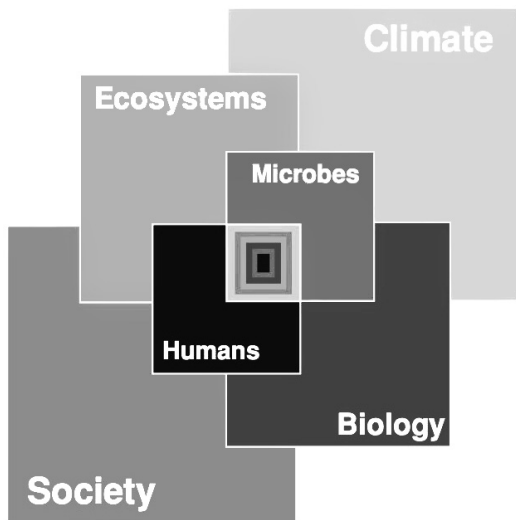


図1.2 動的な社会生態系の6つのコアとなる構成要素
典拠：National Academy of Sciences (2008), figure SA-4, 14に基づく。

て存在しているとき、その均衡は静的ではなく動的である。人間と環境による圧力と潜在的な力が少しでも変化すればこの均衡はゆらぎ、一定の範囲内でバランスと順応を保っていた一つの動的な社会生態系から、まったく異なる範囲内で変化するもう一つの社会生態系へとシステムの転換が始まるのだ。「大遷移」を構成する人間と環境の相互作用をこうした方法で概念化することによって、その複雑な多面的性格と固有の可変的傾向が強調される。環境面であれ経済面であれ、気候面であれ文化面であれ、決定論は適切ではない。というのも、構成要素のあらゆる変数は何らかの仕方で相互に関係していると考えられ、したがってすべてが社会生態系の解明にとって価値を持つからである。表面上外因的に見える環境のプロセスよりも内因的な人間のプロセスに重きを置くこともまた、誤った二分法を作り出すことになる。なぜなら、このモデルには内因的でないものなど存在しないからだ。

もちろん、中世社会は長期にわたるため、気候および疫学上の環境を多少なりとも無視できる期間もあった。第2章で検証するように、11世紀後半のオールト極小期の終わりから13世紀後半のウォルフ極小期の始まりまでの200年のう

ち、ほとんどの期間がそれに該当するようだ。この期間は一貫して日射量が多く、中央アジアの大干ばつという目立った例外はあるが、生物学的にも物理学的にも、環境上の出来事は社会の発展にほとんど影響を与えなかった。当時の社会的発展は、とりわけ宗教的、政治的、軍事的、経済的、そして商業的な相互交流から影響を受けていた¹⁰⁸。1257/58年の大規模噴火などの環境的衝撃は社会が変化するきっかけをもたらしたが、めったに長引くことはなく、社会はほとんど変化せず以前の状態へ復元した¹⁰⁹。この点で、当時の社会には復元力^{レジリエンス}があった¹¹⁰。より活動的だったのが中国の宋やラテン・キリスト教世界などの社会で、そこでは、幸運なことに自然と人間の環境がおおむね穏やかだった。しかし、このような幸運は長くは続かなかった。

13世紀の終わり頃に気候は不安定になり、より直接人間の活動に影響をおよぼし始めていた。その頃、人口増加や商業拡大、資源不足ゆえに、社会は環境に対してより敏感になっていたのだ¹¹¹。14世紀初頭以降、政治・経済上の緊張が高まり、国家間の対立が増加するにつれて、気候によって生み出される生態的緊張はますます前面にせり出してくるようになった。気象条件や生育条件、穀物や羊毛の収穫高や他の多くのことが年ごとに大きく変動し、後退するたびに回復にかかる時間も延びてゆき、回復そのものがより困難になっていった¹¹²。自然や人間が幾度となく度を超えた出来事にさらされることで、危機に対処するシステムはその能力を浸蝕されていった¹¹³。こうした危機は、システムが決定的に遷移する兆候である。システム内のどこかに小さな変化が生じると、これをきっかけとして一連の反応が増幅し、システムを圧倒して別の状態に遷移する可能性が生じるのである¹¹⁴。

「大遷移」の場合、決定的な転換点は14世紀中葉の数年で生じた。その転換点

¹⁰⁸ Section 2.01 参照。

¹⁰⁹ Section 2.02.5と図2.9 参照。

¹¹⁰ この箇所および以降用いる復元力は、あるシステムが障害のある状態から元の状態に回復する能力」と定義づけられる。Scheffer (2009), 11.

¹¹¹ Section 3.01と3.02 参照。

¹¹² 図4.4 参照。

¹¹³ Section 3.01.3; Scheffer (2009), 282-95; Hoffmann (2014), 342-51.

¹¹⁴ システム理論では、これは分岐点 (bifurcation point) と呼ばれている。Scheffer (2009), 18-22, 96-105.

でルビコン川は渡られ、変化の勢いと方向性は互いに補強し合い、後戻りできなくなった。こうしてついに中世温暖期（MCA）は終わった。大気の循環パターンは決定的に変化し、「第二次パンデミック」が致命的な歩みを始め、それまでに確立していた国際交易と商業のパターンと規模は失われた。その結果、ヨーロッパの人口は過去千年で最大かつもっとも持続的な逆転現象を経験し、確立していた権力機構と生産関係はほぼいたるところで難局を迎え、立て直しを余儀なくされた¹¹⁵。これはときおり14世紀の「危機」と呼ばれるが、この手垢のついた用語は、進行中の変化の大きさと意義をあまり公平に評価していない¹¹⁶。その代わりとして、「転換点 tipping point」という生態学的な概念の方が、よりの確に、この変化に内在する革新的性格とその複雑な起源の両方を表現している¹¹⁷。

転換点は重要な歴史の変わり目を示し、明らかにまれな出来事である¹¹⁸。それは大きく、複雑で、多面的な事象であるため、新しい社会生態的の均衡状態が確立するまで何年もかかる可能性があり、それまでは多くの分野で不安定さが強まる傾向にあった。「大遷移」の場合、14世紀半ばの転換点までの準備段階から転換点が解消されるまで、およそ200年かかった。この全期間にわたって、気候と社会、生態学と生物学、微生物と人間が漸進的に変化した（図1.2）。これら6つの点すべてについて、1450年代までに行き渡った状況は、1250年代に特徴的だった状況とはまったく異なっていた。それがどのように生じたのかを解明するためには、環境史と経済史のアプローチを組み合わせ、古気候学者、微生物学者、遺伝学者、骨考古学者、それから歴史学者の研究結果を統合し、それにともない証拠や方法、パラダイムの違いに取り組む必要がある。

1.04 「大遷移」を追跡する：規模、焦点、証拠の諸問題

「大遷移」を構成する気候、疾病、社会の変化のうち、気候の変化はもっとも巨大な力によって成し遂げられ、最大の地理的規模で展開した。気候に重要な

¹¹⁵ Russell (1958); McEvedy and Jones (1978), 41–119; Biraben (1979).

¹¹⁶ Hybel (1989).

¹¹⁷ Scheffer (2009), 11–25. 「転換点 tipping point」という用語の起源と、気候変動に関する近年の議論での使用に対する批評は Russill (2015) を見よ。

¹¹⁸ 17世紀中葉をそのような時期ととらえる論拠は Parker (2013) による。

影響を与えるものとして、太陽放射量、コリオリの力と地球の軌道、海洋と大気の相互作用の特徴、大陸の地形、散発的に生じる火山性エアロゾルの放出、そして地球大気圏外の衝突による降水物がある。さらに、遠く離れた場所の気候系は気候学者が遠隔相関と呼ぶ現象により密接に結びついているため、互いに独立して変化することはめったにない¹¹⁹。太平洋のラニーニャ現象とエルニーニョ現象が気候に与える影響は、まさにこの遠隔相関を介して世界中に伝わる。そして同様に、インド洋の熱帯および亜熱帯における気圧勾配を、北西に数千マイルも離れた北大西洋の温暖な緯度帯で支配的な圧力勾配と結びつけるのも遠隔相関である¹²⁰。中世においては、遠隔地の場合、社会どうしが結びついていなくとも気候は互いに結びついていた。このことを理解していたヴィクター・リーバーマンは、相互に孤立して存在する社会の歴史に見られる「奇妙な並行性」を説明するために、これを引き合いに出した¹²¹。

中世後期の数世紀間において中世温暖期（MCA）特有の典型的な大気循環パターンが小氷期（LIA）特有のそれへと変化していたが、この間に生じた気象条件の変化を理解するには、南北アメリカ大陸とユーラシア大陸、北半球と南半球、グリーンランドと南極の氷原から得た時系列データを関連づける必要がある。また、尺度として古気候指標（proxy climate measures）を信頼する必要がある。この指標はおおよそ以下のものから導き出される。年輪（年輪年代学）、北極やアルプスのアイスコア、石筍（洞窟二次生成物）、層化した湖や海の岩礁の堆積物（年層）、サンゴの成長などだ。これらの指標は、可能な限り近年計測された気象データと比較して調整される。何百年、しばしば何千年にもおよぶこれらのデータセットの総数、地理的な適用範囲、時間分解能、そして信頼性はつねに改良されており、今やその多くは公開されている¹²²。図1.1が例証するように、北半球全体における平準化された時系列の比較こそが、1250年頃から1450年頃までに起こった変化を浮き彫りにし、当時のヨーロッパで起こった経

¹¹⁹ 注8参照。

¹²⁰ Wangほか（2005）。

¹²¹ Lieberman（2009），79-87，687-91。

¹²² 包括的な古気候学のウェブサイトはアメリカ合衆国のNational Oceanic and Atmospheric Administration（NOAA）のNational Climatic Data Center（NCDC）が管理している。
<http://www.ncdc.noaa.gov/data-access/paleoclimatologydata>。

経済的・人口統計学的な発展にグローバルな文脈を与えるのである。

疫病もまたあらゆる境界を越える存在だった。とはいえ、ヨーロッパの船乗りたちが新大陸を発見するまでのあいだは、大西洋と太平洋という防疫線が旧世界の病原菌から新世界を保護しており、その逆もまた然りであった¹²³。それゆえ14世紀において、畜牛と人間に蔓延した致死的な病気は基本的に旧世界の出来事であり続けた。一つはウイルス、もう一つはバクテリアを原因とするこの二つの疫病は内陸アジアを発生源とし、そこから西方に、ヨーロッパの大西洋岸まで拡大していった¹²⁴。「第二次パンデミック」に関する現代の研究は、中央アジア乾燥帯における生育状態と降水レベルに関する古気候指標から得られる情報を、次の三つの点と結びつける。第一に、異なる場所に広がったペスト菌に関する同時代のゲノム情報、第二に、過去の疫病犠牲者から採取された古DNAの証拠（現在のところそのすべては西ヨーロッパの黒死病犠牲者の墓で検出されたもの）、そして第三に、歴史的な疫病の発生を説明し、それにより追跡を可能にする、相当数にのぼる文献情報である¹²⁵。とくにイングランドにおける黒死病の発生と拡大は、情報源の質の高さから詳細にわたり注目されてきた。しかし、ヨーロッパと中東の両地域でも疫病流行の包括的な調査が行われている¹²⁶。これらは、中央アジア、アフリカ、北アメリカにおける近代ペストの科学研究とあわせて議論できるだろう¹²⁷。

疫病が大陸規模で広がったことから得られる豊富な情報量ゆえに、汎ユーラシア規模での分析が求められ、またその必要性は増大している¹²⁸。実際、中央アジアの保菌地域、とくに中国西方のチベット・青海高原の推定起源地域におけるペストの動きを理解することは、そのときペストがなぜ発生し、またその後どのように繰り返しヨーロッパに感染拡大をもたらしたのかを説明するうえで重要である¹²⁹。歴史上のペスト発生に関する研究が共同研究になるのは必然であり、主要な研究チームすべてが、黒死病が旧世界規模の現象であることに

¹²³ Diamond (1999), 210–14, 357–8.

¹²⁴ 図3.25, 4.9, 4.10 参照。

¹²⁵ 例として Schmid ほか (2015); Green (2014).

¹²⁶ Shrewsbury (1971); Hatcher (1977); Biraben (1975); Benedictow (2004); Dols (1977).

¹²⁷ たとえば Stenseth ほか (2006); Kausrud ほか (2010); Vogler ほか (2011).

¹²⁸ Green (2014).

¹²⁹ Section 3.03.2. Kausrud ほか (2010); Cui ほか (2013); Schmid ほか (2015).

注意し、またアジアにおける疫病の発生と拡大に関する知識や理解を改善していかねばならない¹³⁰。

ペストはアジアからヨーロッパ、北アフリカにまで比較的容易に到達した。それは、モンゴルの支配下で統合されたこの広大な領域における商業的・政治的つながりの強さゆえであった¹³¹。こうしたつながりを単に叙述するだけなら容易だが、その数量化は困難である。というのも、中世史家が証拠として依拠する文書記録は断片的で、多様な特徴を持つからだ。文書の作成・保存は均質ではなく、経済上、人口統計上の傾向を長期にわたり国家を超えたレベルで再構成するための材料は明らかに不足している。人口や都市化、貨幣製造についてはヨーロッパ規模の有益な概算があるが、他地域についてはほとんどない¹³²。それゆえ、地方、地域、国家単位の事例研究に信頼を置かねばならない。そのなかでも、イングランドの証拠はずば抜けている。

イングランドについては、12世紀後半における主要な商品価格や、13世紀前半における労働者の一日当たりの賃金率、それとほぼ同時期の実質賃金率の情報が利用可能だ。これら一連の価格・賃金は1260年代までは断続的な記録にとどまるが、その後毎年継続して記録されるようになる¹³³。1270年代からは、小作農の数や農産物の種類、収穫高、輸出量、国家財政、また農村部の土地市場やその他諸々についての良質なデータが存在する。さらに近年、データは年単位の人口や生産高に基づく国内総生産、一人当たりのGDPを明らかにするために用いられている¹³⁴。これらは、ヨーロッパ経済について利用可能なあらゆるもののうち、もっとも早期の、かつしっかりしたデータ群である。しかし、第2章で明らかになることだが、これらを情報源とする1300年以前の経済や人口統計上の傾向について議論するにあたり、イングランド中心的な強いバイアスがかかるのは必然だろう¹³⁵。結果として、この期間についてイングランドの歴

¹³⁰ 特筆すべき例は、オスロ大学の European Research Council による助成プロジェクト「中世の黒死病——生態環境、伝達様式、感染経路」である。<http://www.mn.uio.no/cees/english/research/projects/650125/>.

¹³¹ McNeill (1977), 161-207; 図2.1 参照。

¹³² Russel (1958); McEvedy and Jones (1978); Biraben (1979); Bairoch ほか (1988); Spufford (1988), 419.

¹³³ 多くは Clark (2009) で容易に利用できる。<http://www.iisg.nl/hpw/data.php#united>.

¹³⁴ Broadberry ほか (2015).

史研究はもっとも飛躍した。しかし一方で、マルクス主義理論と新古典派経済学に裏付けられた人間中心的な分析が長らく支配的だったこともあり、環境の変化とその影響力の歴史的役割に対してこれまでほとんど注意が払われてこなかった¹³⁶。

「大遷移」のすべての段階において、ヨーロッパで細部まで経済状況を計量化でき、追跡でき、それゆえこれまで議論の対象になってきた経済圏はイングランドにおいてほかにない。そのため、イングランドは以下の章においてデフォルトの事例研究である。この国は、後期中世に存在した大半の西欧諸国より人口が多く、都市化、市場化、貨幣経済化を果たしていたが、これと同じ指標において、低地地方南部やイタリアの主要な経済圏と比べてつねにはるかに立ち後れていた¹³⁷。17世紀後半になるとイングランドはこの両経済圏に追いつき、追い抜き、そして世界有数の経済圏になり、はじめて工業化と近代的な経済成長への完全なる移行を成し遂げた¹³⁸。後世の経済的な成功を考慮に入れると、それに先立つ時代のイングランド史を取り出してこれに特別な注意を払う意義もなくはないが、中世においてイングランドがのちに偉大な国になることを示すものは何もなかった。それどころか、後期中世のイングランドはヨーロッパの経済番付で中位にあり、ほとんどの指標に照らして他国より良くも悪くもなかった¹³⁹。

13世紀から14世紀初頭までのイングランドに由来する史料の質の高さを念頭におくと、その他すべての国における史料不足が際立つ。毎年的小麦価格など、分析に役立つ経済的な基準がほぼ欠如している。低地地方南部・北部にある国々は黒死病が過ぎ去ったあともしばらくこのような記録を残さず、スウェーデンとスペインについては黒死病期以降について手にしうる情報は断片的である。現在のところトスカナ地方だけが完全な年別統計を有するが、イングランドに比べて始点が遅く、確実な数値でもなければ代表的でもない¹⁴⁰。それにもか

¹³⁵ Campbell (2013c).

¹³⁶ マルクス主義的な、そして新古典主義的な中世後期の危機解釈は「ブレナー論争」で衝突した。Aston and Philpin (1985). 関連する英語文献の包括的なレビューは Hatcher and Bailey (2001) を見よ。

¹³⁷ Campbell (2013c).

¹³⁸ Broadberry ほか (2015).

¹³⁹ Cambell (2013c).

かわらず、パオロ・マラーニマは、1310年からの中部・北部イタリアにおける1日当たりの実質賃金率と都市化の度合を見積もることによって、当時のイタリアの国民所得と1人当たりのGDPを再構築してみせた。彼の見積もりは、第3章と第5章でイングランドと同時代のヨーロッパ先進経済圏を比較する際に最大限活用する¹⁴¹。他の経済圏については、経済発展の質的な説明はできるが、量的な情報はせいぜい寄せ集めといったところである。スペインには、イベリア半島諸王国の経済活動を量的に再構築するうえで基礎になりうる文書記録が豊富にあるが、そのような再構築の作業はほとんど始まっていない¹⁴²。それどころか、不完全な国の物価・賃金統計をスペインの都市化の度合に関する見積もりと組み合わせることで、国民所得および1人当たりのGDPを暫定的に推計し、これを信頼しなければならない¹⁴³。こうした観点からは、低地地方の南部がその経済的な重要性のわりに時系列に沿った統計データを致命的なまでに欠落させていることを思えば、スペインはそれでもなお恵まれていると言えるだろう。一方、低地地方の北部は、小さくも先進的なホラント州が経済史家によってよく研究され、1348年以降のオランダ1人当たりのGDPを暫定的に算出することでさらなる比較の土台が得られた。その結果、ホラント州がヨーロッパでもっとも急速に経済成長を成し遂げて「大遷移」のなかから頭角を現し、その世紀のうちにほぼ確実に世界でもっとも成功した経済圏になったことが判明している¹⁴⁴。まとめると、イングランド、イタリア、スペイン、そして低地地方の国々は、本書で「大遷移」を分析・叙述し、それに先立つ開花期を再構成するうえで、社会・経済的構成要素の基盤を提供するのである。

文献リスト

- Abu-Lughod, Janet L. (1989), *Before European hegemony: the world system A.D. 1250–1350*, Oxford.
- Allen, Martin (2012), *Mints and money in medieval England*, Cambridge.
- Álvarez-Nogal, C.; Prados de la Escosura, L. (2013), ‘The rise and fall of Spain (1270–1850)’,

¹⁴⁰ Malanima (no date b).

¹⁴¹ Malanima (2011).

¹⁴² ポルトガルの史料の先駆的な分析について Henriques (2015).

¹⁴³ Álvarez-Nogal and Prados de la Escosura (2013).

¹⁴⁴ Zanden and Leeuwen (2012). この箇所および以降用いる Holland は、のちにオランダになる国のことではなく州を指している。

EcHR, 66 (1), 1–37.

- Aston, T. H.; Philpin, C. H. E., eds. (1985), *The Brenner debate: agrarian class structure and economic development in pre-industrial Europe*, Cambridge.
- Bailey, Mark (1991), ‘*Per impetum maris*: natural disaster and economic decline in eastern England, 1275–1350’, 184–208 in Bruce M. S. Campbell, ed., *Before the Black Death: studies in the ‘crisis’ of the early fourteenth century*, Manchester.
- Bairoch, Paul and others (1988), *The population of European cities from 800 to 1850: data bank and short summary of results*, Geneva.
- Bauch, Martin (2016), ‘The day the sun turned blue. A volcanic eruption in the early 1460s and its possible climatic impact – a natural disaster perceived globally in the late Middle Ages?’, in Gerrit J. Schenk, ed., *Historical disaster experiences: a comparative and transcultural survey between Asia and Europe*, Heidelberg.
- Benedictow, Ole J. (2004), *The Black Death 1346–1353: a complete history*, Woodbridge.
- Berkelhammer, Max and others (2010b), ‘Dandak Cave, India Speleothem Oxygen Isotope Data’, IGBP # 2010-011.
- Biraben, Jean-Noël (1975), *Les hommes et la peste en France et dans les pays européens et méditerranéens, I, La peste dans l’histoire*, Paris and The Hague.
- Bois, Guy (1984), *The crisis of feudalism: economy and society in eastern Normandy c.1300–1550*, Cambridge.
- Bolton, J. L. (2012), *Money in the medieval English economy: 973–1489*, Manchester.
- Bos, Kirsten I. and others (2011), ‘A draft genome of *Yersinia pestis* from victims of the Black Death’, *Nature* 478 (7370), 506–10.
- Britton, C. E. (1937), *A meteorological chronology to A.D. 1450*, London, Meteorological Office Geophysical Memoirs 70.
- Broadberry, Stephen N. and others (2015), *British economic growth 1270–1870*, Cambridge.
- Brook, Timothy (2010), *The troubled empire: China in the Yuan and Ming Dynasties*, Cambridge, Mass.
- Brooke, John L. (2014), *Climate change and the course of global history: a rough journey*, Cambridge.
- Campbell, Bruce M. S. (1995b), ‘Ecology versus economics in late thirteenth- and early fourteenth-century English agriculture’, 76–108 in Del Sweeney, ed., *Agriculture in the Middle Ages: technology, practice, and representation*, Philadelphia.
- Campbell, Bruce M. S. (2009b), ‘Four famines and a pestilence: harvest, price, and wage variations in England, 13th to 19th centuries’, 23–56 in Britt Liljewall and others, eds., *Agarrhistoria på många sätt: 28 studier om människan och jorden. Festskrift till Janken Myrdal på hans 60-årsdag*, Stockholm.
- Campbell, Bruce M. S. (2010a), ‘Nature as historical protagonist: environment and society in pre-industrial England’ (the 2008 Tawney Memorial Lecture), *EcHR* 63 (2), 281–314.
- Campbell, Bruce M. S. (2011a), ‘Grain yields on English demesnes after the Black Death’, 121–74 in Mark Bailey and Stephen H. Rigby, eds., *England in the age of the Black Death: essays in honour of John Hatcher*, Turnhout.
- Campbell, Bruce M. S. (2013c), ‘National incomes and economic growth in pre-industrial

- Europe: insights from recent research', *Quaestiones Medii Aevi Novae* 18, 167–96.
- Campbell, Bruce M. S.; Ó Gráda, Cormac (2011), 'Harvest shortfalls, grain prices, and famines in pre-industrial England', *JEH* 71 (4), 859–86.
- Carmichael, Ann G. (2014), 'Plague persistence in western Europe: a hypothesis', 157–92 in Monica Green, ed., *Pandemic disease in the medieval world: rethinking the Black Death, The Medieval Globe* 1, special issue, www.arc-humanities.org/the-medieval-globe.html.
- Carus-Wilson, E. M.; Coleman, Olive (1963), *England's export trade: 1275–1547*, Oxford.
- Chen, Fa-Hu and others (2010), 'Moisture changes over the last millennium in Arid Central Asia: a review, synthesis and comparison with monsoon region', *QSR* 29 (7), 1055–68.
- Chen, Fa-Hu and others (2012), 'Arid Central Asia 1000 year synthesized moisture reconstruction', IGBP # 2012–023.
- Clark, Gregory (2009), 'English prices and wages 1209–1914', Global Price and Income History Group, www.iisg.nl/hpw/data.php#united.
- Cook, Edward R. and others (2004b), 'Long-term aridity changes in the western United States', *Science* 306, 1015–18.
- Cook, Edward R. and others (2004c), 'North American summer PDSI reconstructions', IGBP # 2004-045.
- Cui, Yujun and others (2013), 'Historical variations in mutation rate in an epidemic pathogen, *Yersinia pestis*', *PNAS* 110 (2), 577–82.
- Delaygue, G.; Bard, E. (2010a), 'An Antarctic view of Beryllium-10 and solar activity for the past millennium', *Climate Dynamics early edn*, 18pp. Data: Delaygue and Bard (2010b), 'Antarctic last millennium 10Be stack and solar irradiance reconstruction', IGBP # 2010-035.
- Di Cosmo, Nicola (2005), 'Mongols and merchants on the Black Sea frontier in the thirteenth and fourteenth centuries: convergences and conflicts', 391–424 in Reuven Amitai and Michal Biran, eds., *Mongols, Turks, and others: Eurasian nomads and the sedentary world*, Leiden and Boston.
- Diamond, Jared (1999), *Guns, germs and steel: the fates of human societies*, New York and London.
- Dols, Michael W. (1977), *The Black Death in the Middle East*, Princeton.
- Dotterweich, Markus (2008), 'The history of soil erosion and fluvial deposits in small catchments of central Europe: deciphering the long-term interaction between humans and the environment – a review', *Geomorphology* 101, 192–208.
- Edwards, Jeremy; Ogilvie, Sheilagh (2012), 'What lessons for economic development can we draw from the Champagne fairs?', *EEH* 49 (2), 131–48.
- Esper, J. and others (2009), 'Morocco millennial Palmer Drought Severity Index reconstruction', IGBP # 2009-032.
- Fraedrich, K. and others (1997), 'Multi-scale detection of abrupt climate changes: application to River Nile flood levels', *International Journal of Climatology* 17, 1301–15.
- Fryde, E. B. (1988), *William de la Pole, merchant and king's banker*, London
- Green, Monica, ed. (2014), *Pandemic disease in the medieval world: rethinking the Black Death, The Medieval Globe* 1, special issue, www.arc-humanities.org/the-medieval-globe.html.

- Grove, Jean M. (2004), *Little Ice Ages: ancient and modern*, 2 vols., 2nd edn, London.
- Hassan, Fekri A. (2011), 'Nile flood discharge during the Medieval Climate Anomaly', *PAGES news* 19, 30–1.
- Hatcher, John (1977), *Plague, population and the English economy 1348–1530*, London and Basingstoke.
- Hatcher, John; Bailey, Mark (2001), *Modelling the Middle Ages: the history and theory of England's economic development*, Oxford.
- Henriques, António (2015), 'Plenty of land, land of plenty: the agrarian output of Portugal (1311–20)', *EREH* 19 (2), 149–70.
- Hoffmann, Richard C. (2014), *An environmental history of medieval Europe*, Cambridge.
- Hunt, Edwin S.; Murray, James M. (1999), *A history of business in medieval Europe, 1200–1550*, Cambridge.
- Hybel, Nils (1989), *Crisis or change: the concept of crisis in the light of agrarian structural reorganization in late medieval England*, Aarhus.
- Jordan, William Chester (1996), *The Great Famine: Northern Europe in the early fourteenth century*, Princeton.
- Kander, Astrid and others (2014), *Power to the people: energy in Europe over the last five centuries*. Princeton.
- Kausrud, Kyrre Linné and others (2010), 'Modeling the epidemiological history of plague in Central Asia: palaeoclimatic forcing on a disease system over the past millennium', *BMC Biology* 8 (112), 14pp.
- Kedar, B. Z. (1976), *Merchants in crisis: Genoese and Venetian men of affairs and the fourteenth-century depression*, New Haven and London.
- Kelly, Morgan; Ó Gráda, Cormac (2014), 'The waning of the Little Ice Age: climate change in early modern Europe', *JIH* 44 (3), 301–25.
- Laayouni, H. and others (2014), 'Convergent evolution in European and Roma populations reveals pressure exerted by plague on toll-like receptors', *PNAS* 111 (7), 2668–73.
- Lieberman, Victor (2009), *Strange parallels: Southeast Asia in global context, c.800–1830, 2, Mainland Mirrors: Europe, Japan, China, South Asia, and the Islands*, Cambridge.
- Lieberman, Victor; Buckley, Brendan (2012), 'The impact of climate on Southeast Asia, circa 950–1820: new findings', *Modern Asian Studies* 46, 1049–96.
- Lloyd, T. H. (1977), *The English wool trade in the Middle Ages*, Cambridge.
- Loehle, Craig; McCulloch, J. Huston (2008), 'Correction to: "A 2000-year global temperature reconstruction based on non-tree ring proxies"', *Energy & Environment* 19 (1), 93–100, www.econ.ohio-state.edu/jhm/AGW/Loehle/.
- Lopez, Robert S. (1987), 'The trade of medieval Europe: the South', 306–401 in M. M. Postan and Edward Miller, eds., *The Cambridge economic history of Europe, II, Trade and industry in the Middle Ages*, 2nd edn, Cambridge.
- Maddicott, John Robert (1987), 'The English peasantry and the demands of the Crown, 1294–1341', 285–359 in T. H. Aston, ed., *Landlords, peasants and politics in medieval England*, Cambridge. Reprinted from (1975), P&P, Supplement 1.
- Magilligan, Francis J.; Goldstein, Paul S. (2001), 'El Niño floods and culture change: a late

- Holocene flood history for the Rio Moquegua, southern Peru', *Geology* 29 (5), 431–4.
- Malanima, Paolo (2011), 'The long decline of a leading economy: GDP in central and northern Italy, 1300–1913', *EREH* 15 (2), 169–219.
- Malanima, Paolo (no date b), 'Wheat prices in Tuscany', Institute of Studies on Mediterranean Societies, Italian National Research Council.
- Mann, Michael E. and others (2008), 'Proxy-based reconstructions of hemispheric and global surface temperature variations over the past two millennia', *PNAS* 105 (36), 13252–7. Data: www.ncdc.noaa.gov/paleo/metadata/noaa-recon-6252.html.
- Mann, Michael E. and others (2009), 'Global signatures and dynamical origins of the Little Ice Age and Medieval Climate Anomaly', *Science* 326 (5957), 1256–60.
- McEvedy, Colin; Jones, Richard (1978), *Atlas of world population history*, Harmondsworth.
- McNeill, William H. (1977), *Plagues and peoples*, New York.
- Mohtadi, Mahyar and others (2007), 'Cooling of the southern high latitudes during the medieval period and its effect on ENSO', *QSR* 26, 1055–66.
- Mokyr, Joel (1992), *The lever of riches: technological creativity and economic progress*, Oxford.
- Munro, John H. (1991), 'Industrial transformations in the north-west European textile trades, c.1290–c.1340: economic progress or economic crisis?', 110–48 in Bruce M. S. Campbell, ed., *Before the Black Death: studies in the 'crisis' of the early fourteenth century*, Manchester.
- Newfield, Timothy P. (2009), 'A cattle panzootic in early fourteenth-century Europe', *AHR* 57 (2), 155–90.
- Newfield, Timothy P. (2012), 'A great Carolingian panzootic: the probable extent, diagnosis and impact of an early ninth-century cattle pestilence', *Argos* 46, 200–10.
- Nicholas, David M. (1987), *The metamorphosis of a medieval city: Ghent in the age of the Artevelde, 1302–1390*, Lincoln (Nebraska) and London.
- O'Rourke, K. H.; Williamson, J. G. (2002), 'After Columbus: explaining Europe's overseas trade boom, 1500–1800', *JEH* 62 (2), 417–56.
- Parker, Geoffrey (2013), *Global crisis: war, climate change and catastrophe in the seventeenth century*, New Haven and London.
- Phillips, J. R. S. (1988), *The medieval expansion of Europe*, Oxford and New York.
- Pomeranz, Ken (2000), *The Great Divergence: China, Europe, and the making of the modern world economy*, Princeton.
- Popper, William (1951), *The Cairo Nilometer: studies in Ibn Taghrī Birdī's chronicles of Egypt I*, Berkeley and Los Angeles.
- Proctor, C. J. and others (2002a), 'A three thousand year record of North Atlantic climate', *Climate Dynamics* 19 (5–6), 449–54.
- Proctor, C. J. and others (2002b), 'Northwest Scotland stalagmite data to 3600 BP', IGBP # 2002-028.
- Rad, Ulrich von and others (1999), 'A 5000-year record of climate change in varved sediments from the oxygen minimum zone off Pakistan, northeastern Arabian Sea', *Quaternary Research* 51 (1), 39–53.
- Rein, Bert and others (2004), 'A major Holocene ENSO anomaly during the medieval period',

- GRL 31, L17211, 4pp. Data : www.klimaundsedimente.geowiss.uni-mainz.de/128.php.
- Russell, Josiah Cox (1958), 'Late ancient and medieval population', *Trans. American Philosophical Soc.* 48 (3), 1–152.
- Russill, Chris (2015), 'Climate change tipping points: origins, precursors, and debates', *WIREs Climate Change*.
- Scheffer, Marten (2009), *Critical transitions in nature and society*, Princeton.
- Schmid, Boris V. and others (2015), 'Climate-driven introduction of the Black Death and successive plague reintroductions into Europe', *PNAS*, 23 February.
- Sharp, Buchanan (2000), 'The food riots of 1347 and the medieval moral economy', 35–54 in A. Randall and A. Charlesworth, eds., *Moral economy and popular protest: crowds, conflict and authority*, London.
- Shrewsbury, J. F. D. (1971), *A history of bubonic plague in the British Isles*, Cambridge.
- Sinha, Ashish and others (2011), 'A global context for megadrought in Monsoon Asia during the past millennium', *QSR* 30, 47–62.
- Spinage, C. A. (2003), *Cattle plague: a history*, New York, Boston, Dordrecht, London and Moscow.
- Spufford, Peter (1988), *Money and its use in medieval Europe*, Cambridge.
- Stenseth, Nils Chr. and others (2006), 'Plague dynamics are driven by climate variation', *PNAS* 103 (35), 13110–15.
- Stephenson, Martin J. (1988), 'Wool yields in the medieval economy', *ECHR* 41 (3), 368–91.
- Tana, Li (2014), 'Towards an environmental history of the eastern Red River Delta, Vietnam, c.900–1400', *Journal of Southeast Asian Studies* 45, 315–37.
- Trouet, V. and others (2009a), 'Persistent positive North Atlantic Oscillation mode dominated the Medieval Climate Anomaly', *Science* 324, 78–80.
- Tuchman, Barbara Wertheim (1978), *A distant mirror: the calamitous fourteenth century*, New York.
- Unger, Richard W. (1980), *The ship in the medieval economy 600–1600*, London.
- Vieira, L. E. A. and others (2011), 'Evolution of the solar irradiance during the Holocene', *Astronomy & Astrophysics* 531, 20pp.
- Wang, Yongjin and others (2006), Dongge Cave stalagmite high-resolution Holocene $\delta^{18}O$ data', IGBP # 2006-096.
- Wang, Yongjin and others (2005), 'The Holocene Asian monsoon: links to solar changes and North Atlantic climate', *Science* 308 (5723), 854–7.
- Wheelis, Mark (2002), 'Biological warfare at the 1346 siege of Caffa', *EID* 8 (9), 971–5.
- Yule, Sir Henry, trans. & ed. (1875), *The book of Marco Polo, the Venetian, concerning the kingdoms and marvels of the East*, 2 vols., revised 2nd edn, London.
- Zanden, Jan Luiten van; Leeuwen, Bas van (2012), 'Persistent but not consistent: the growth of national income in Holland 1347–1807', *EEH* 49 (2), 119–30.
- Zhang, Zhibin and others (2007), 'Relationship between increase rate of human plague in China and global climate index as revealed by cross-spectral and cross-wavelet analyses', *Integrative Zoology* 2 (3), 144–53.

訳者解題

大貫 俊夫

本翻訳は、Bruce M. S. Campbell, *The Great Transition: Climate, Disease and Society in the Late-Medieval World*, Cambridge, 2016から第1章を抜粋して全訳したものである。著者キャンベルは1995年から2014年まで北アイルランドのクイーンズ大学ベルファストで教授を務めた、中世ヨーロッパ経済史の第一人者である。研究のキャリアをケンブリッジ大学大学院に進学した1970代の初頭に始め、アラン・ベイカーの指導のもと、後期中世ノーフォークの荘園研究に従事した。クイーンズ大学ベルファストの教授に着任すると、中世イングランドの経済史研究を推進するとともに¹、たびたび自然科学の研究者らと共同研究を行うようになった。今世紀に入ると、氏は研究ディシプリン上の視野を環境史に広げ、地理的にはアフロ・ユーラシア全域を見渡すようになった。その研究手法上の最大の特徴は、中世イングランドに由来する豊富な統計資料と年輪年代などの古気候学の成果を駆使し、文字史料と付き合わせながら明晰な分析を繰り返す点にある²。

氏が本書でユーラシア大陸規模で中世後期の社会・経済のダイナミックな変遷に強い関心を寄せているのは、以上の経緯を踏まえてのことである。本書『大遷移』は、13世紀後半から15世紀後半までを視野に収め、これを3つの時期に区分して大きな「遷移 transition」とそれを決定づけた「転換点 tipping point」を描き出し、この2世紀におよぶ環境と人間社会の移行メカニズムとそれが示す歴史的意義を活写している。そのうち本稿で訳出した第1章は、脚注で第2章以降の章節を参照する指示が多いことからわかるように、本書全体の要約であり、設計図のような役割を果たしている。それゆえこれだけを邦訳する意義は大きいと考えたが、歴史学における文理融合研究の重要性を端的に教えてくれる点、あるいはパンデミックと危機に陥る社会の歴史に関心を寄せる世情を

¹ 代表的著作は *English Seigniorial Agriculture, 1250-1450*, Cambridge, 2000; (as co-author) *British Economic Growth, 1270-1870*, Cambridge, 2015.

² たとえば講演を元にした論文 *Nature as historical protagonist: environment and society in pre-industrial England*, in: *Economic History Review* 63(2), 2010, pp. 281-314など。

思うと、著作全体の翻訳が望まれることは言うまでもない。

また、より詳細に本書の意義を理解するために、諫早庸一「13-14世紀アフロ・ユーラシアにおけるペストの道」（『現代思想』2020年5月号、137-144頁）を一読されたい。諫早氏（北海道大学）はキャンベルの議論の問題点を踏まえ、ユーラシア東方の視点からそれを乗り越えるべく、古気候学者中塚武氏（名古屋大学）らと文理共同の研究を推進している。また、黒死病研究の先端を行く研究者としてほかにモニカ・グリーンの名を挙げることができる。彼女はキャンベルの議論でペストの疫学的側面が十分に扱われていないことを批判し、ペストの第2次パンデミックが（1260年代ではなく）もっとそれ以前に、（チベット高原ではなく）天山山脈で起こったと推測している³。この分野の議論はまさに日進月歩である。

本翻訳は、東京都立大学人文社会学部で2020年度前期・後期に開講された「西洋史学演習」の参加者（修士1年1人、学部4年3人、3年9人、2年3人）によるプロジェクトである。2020年度はコロナ禍により、通常より1ヶ月遅れて5月上旬から授業が始まった。授業はすべてオンラインとなり、このゼミも例外ではなく毎回 zoom を用いて行われ、参加者はみな自宅から受講した。本授業は当初より、学生に過度な負担をかけず、しかし最終成果を見える形でアウトプットすることで、学生とともにこの異例な2020年という年を共有し、記憶する、という方針のもと進められた⁴。本翻訳がその成果である。参加者全員が訳文の作成に携わり、最終的に大貫が原稿を整えた。それにあたり、諫早庸一氏から数々の貴重な助言を頂戴した。ここに心より感謝申し上げる。本翻訳は原著出版社 Cambridge University Press の許諾を得て実現したものである（PLSclear Ref No: 40473）。著作権の問題をクリアするためにご尽力下さった原著者キャンベル氏に心から謝意を表したい。

³ Monica Green, “Black as Death”. *Inference* 4/1, 2018-05-31. <http://inference-review.com/article/black-as-death>, (参照 2021-01-31); Ibid, “The Four Black Death,” *The American Historical Review* 125/5 (2020), pp. 1600-1631. 後者は諫早庸一氏の researchmap 上の研究ブログで紹介されている。

⁴ 詳細は『遠隔でつくる人文社会学知——2020年前期の授業実践報告——』雷音学術出版、2020年、58頁を参照のこと。本書は <https://sites.google.com/view/lionpress/> で無料ダウンロードできる。